

7-11					
主題	雑巾制作を通じたご利用者の余暇活動の充実と社会参加の実践				
副題	ご利用者の恩返し、歌やお遊戯をありがとう				
キーワード 1	余暇活動	キーワード 2	社会参加	研究(実践)期間	24 ヶ月

法人名	社福) 友愛十字会	事業所名	友愛荘
発表者(職種)	中村真之(機能訓練指導員)		
共同研究(実践)者	なし		

電 話	042-785-5626	FAX	042-785-5716
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	昭和 49 年の開設であるが、令和 3 年に移転改築した町田市内にある定員 100 名、短期入所 10 名の新しい特養で、従来型とユニット型を併設し、個々に合った生活スタイルや働き方が選べる施設である。「共に生きる」の法人理念の下、学び愛・讃え愛・成長し愛を大切に、ご利用者や職員、地域との共生を目指している。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設における余暇活動の選択肢は乏しく、個人的に本や塗り絵等お持ちでない方はテレビ視聴が主な娯楽となっており、ご利用者が楽しむことが出来る活動の提供が課題であった。また、ご利用者が日々の生活において役割を持つ機会が少ない状況であった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

本研究は、地域の保育園児が行事で披露してくれる歌やお遊戯のお返しとして、卒園児が小学校入学時に使用できる雑巾を贈る活動を行うことで、ご利用者の余暇活動の選択肢を増やすと共に、ご利用者が活動を通じて社会的な役割を感じて活動意欲が向上し、施設内外の交流を促進することができるようになることを目的ならびに仮説とした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

活動 1 年目(令和 4 年度)は、1 階地域交流スペースを会場とし、弊職の判断で針仕事が可能であろうと考えられるご利用者に声をかけ参加者を募り、各ユニットから誘導されたご利用者十数名が月 2~3 回参加する形式で、午前 10 時から昼食までの 1 時間半行うこととして 12 月 8 日から開始した。実施後、以下の課題が上がった。

- ①誘導の時間負担:「H 型」の施設、2 階・3 階各ユニットからの移動を誘導職員 2 名、待機 1 名で実施。単純な対応職員不足他、立案から実施迄の時間短く職員に浸透しておらず、離床・トイレ待ち等で時間を要した等でご利用者の活動開始時間に 30 分ほどのばらつきが生じた。
- ②針仕事の技術的問題: 職員が針に糸を通すことに時間がかかり、針を提供出来ず、お待たせする時間があった。2 回目以降は開始 30 分前から針に糸を通す作業を行い対応した。
- ③ハード面の問題: 用具は裁縫箱一つしかなく、針・糸・鋏・指ぬき等全てが足りなかった。その後は職員の子供や職員自身が学生時代に使用していた裁縫箱を持ち寄り解消した。

④材料の問題：また、贈り物にする為、新品のタオルで作成。施設所有分はもちろん、職員に寄付を募っても足りず、ご利用者ご家族様に募集の告知をしたところ十二分に集まった。現在でも玄関に設置した募集箱に寄付が続けられている。

⑤作業後の満足感不足：会場がある1階まで移動してきたことにより、居室に戻る前に売店に行きたい（1階事務所に売店、各階パブリックスペースに自動販売機あり）、また、外気浴を希望する声が聴かれたが、職員不足で対応が限定的だった。

⑥時間配分等手探りで始めたため、目標枚数に至らず年度末駆け足になってしまった。

2年目（令和5年度）は、個別機能訓練計画を作成する際に根拠としている介護請求ソフトの興味関心チェックシートを活用した。その中で「針仕事に興味のある」という項目にチェックを入れたご利用者5名程度の小人数がユニットリビングで実施する方法にて、対応職員を弊職一人に変更して12月6日から開始した。変更により以下の改善が見られた。

①移動負担の軽減：誘導が無くなったことにより、職員の人員的負担消失。

②リスクの軽減：慣れた環境での活動により、ご利用者の心理的負担や事故リスクの軽減。

③効率の向上：縫える方を優先的に集めたことで、目標枚数を大幅に超える成果を得た。

しかし、この方法は「イベント感の喪失」や「作業感の増加」といった新たな課題も生じた。また、仕上がり枚数が想定より多かった事に欲目が出て、2カ所の保育園に贈ろうとして年度途中から目標枚数を倍にしたことから、結果として駆け込み作業になってしまった。

《4. 取り組みの結果》

3年目（令和6年）は、実施場所を2階・3階の各ユニットから計2カ所に絞り、新たな贈呈先となる保育園も加え計3ヶ所100枚を贈る事を目標として6月12日から開始した。3年目となり現場介護職員との連携も高まり、離床のタイミングやご利用者の入浴日と重ならない曜日を選定する等、効率化を図った。しかしながら、以下の課題が残った。

①目標未達（12月現在）：ADLの低下や入院により参加者減少、また、弊職他業務により予定日に実施出来なかった事による。

②参加の公平性：効率を重視するあまり、ユニットごとの参加機会に格差が生じた。

《5. 考察、まとめ》

多くのご利用者が余暇活動の一つとして本取組を選択し、「もっとやりたい」「まだ出来るよ」と意欲的に参加し、活動を通じて相互に称賛し合い、縫い物が完成した際には達成感を共有し、園児に雑巾を贈ることで地域との交流も深まった。一方で、全てのご利用者に平等な参加機会を提供する仕組みの構築が今後の課題となった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

入居者の暮らしを支えるユニットケア、令和4年7月1日発行、一般社団法人 日本ユニットケア推進センター

《8. 提案と発信》

次年度は、携わる職員を増やし体制強化を図り、活動の継続性と公平性を高める取り組みを計画している。また、雑巾を贈る活動は、他施設でも応用可能な実践であり、取り組みの横展開として、広く情報を発信し普及させていきたい。